

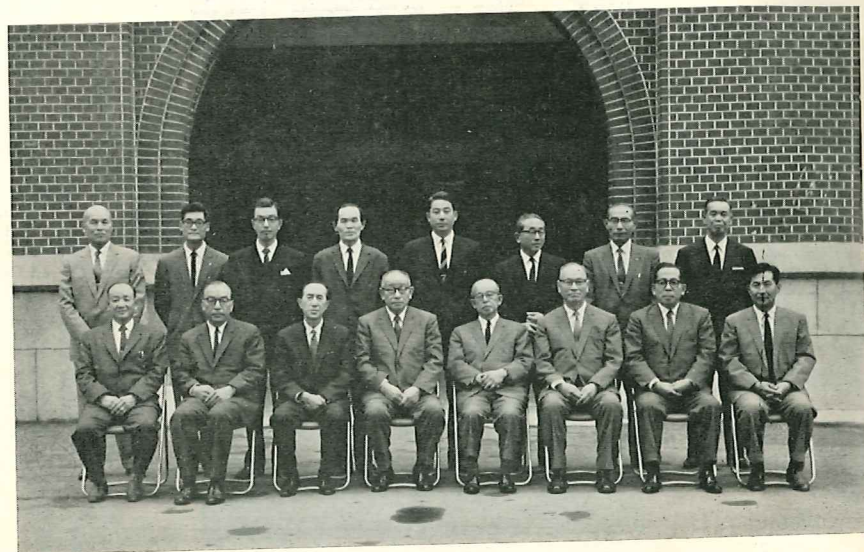
成蹊会誌

1966年12月第

26号



成蹊学園永年勤続者表彰（41年10月15日）



前列（左から）黒川正男・神谷正男・松尾正登（三人おいて）国分勇雄・土方敏夫
後列（左から一人おいて）庭野貞治・保谷秀雄・千田徳児・赤堀秀利・佐々木金之助
橋本武雄・栗原正太郎の諸先生

成蹊会謝恩顕彰会（41年10月21日）



左から 奥田愛子・藤井元子・西原慶一・原田富士子の諸氏

目 次

高瀬 莊太郎総長逝去

弔 辞

小笠原光雄 1

成蹊学園永年勤続者表彰

成蹊20年を思う

国分勇雄 2

松尾 登 5

土方敏夫 6

赤堀秀利 7

黒川正男 8

在職30年の思い出

成蹊会謝恩顕彰会

大成蹊の「椎の一もと」

西原慶一 10

お祝いをうけて

藤井元子 14

奥田愛子 15

原田富士子 16

随 想

久保田正麿先生のこと

梶原景浩 18

世界アルペンスキー選手権に出場して 猪谷素子 20

近況・報告

成蹊学園近況

22

成蹊会近況

26

成蹊学園戦没者慰霊碑名簿の追加について

27

寄付金・会費払込者芳名録

28

物故会員

25

余白をかりて

29

成蹊学園配置図と建物坪数表

30

表紙写真 こんなに大きく育った“けやき”

世界アルペン

スキー選手権に出場して

成蹊高校三年 猪谷 素子

第二十六回世界アルペンスキー選手権大会は八月四日から十四日までチリーのポルティエヨで開催され私達日本選手団は七月六日にチリーのサンチャゴに向って出発した。七日夜サンチャゴに到着。空港で世界選手権の組織委員会の役員はじめ多くの関係者の出迎えを受けた。

九日にサンチャゴから車で約二時間のところにある練習用スキー場のフアレヨネスに入った。ここには大きなホテルもなく各国チーム別に山小屋に泊ることになり、私達はアンデス、スキークラブの小屋に泊った。宿舎では私達の世話係りとしてチリー陸軍のカルバーチヨ一等兵がずっと付き添い、コックさんが毎日通いでやって来て食事の世話をしてくれたが、チリーでは食事の時間が遅いので最初のうちはおなかがすいて困った。

十日からいよいよ練習が始まった。この辺のスキー場は日本と違って岩山で、草木が一本もないためよい広く愛じられる。雪は薄水色のすきとおるように美しく、雪質は日本のよりも良く滑りやすい。スキー場はすいていて自由自在に滑れ、久し振りに粉雪で滑り気持良かった。十四日になるとイギリス、アメリカ、ポーランド等

まれているところに、八月に入って丸山選手も怪我をして結局二人とも試合には出場できなかった。

快晴に恵まれた八月四日午後十二時半から行われた。最初の試合は女子回転競技。前半が四十度近い急斜面でむづかしく、ポールセツトはオーブンテレグラムが圧倒的に多くポールの幅も広く、インターバルがありいつも練習しているものとは違って手惑った。一本目ラップタイムを取ったカナダのナンシー・グリーンは二本目スタート直後の十旗門あたりで転倒し、一本目二位のフランスのアニ・ファモスが優勝した。七日は男子滑降競技。コースは出だしが四十度ぐらいの急斜面でその後は緩斜面が続く途中二、三カ所凹凸の激しいところがあり、女子のコースと交差した後トンネルを二つ越えゴールだが、二つ目のトンネルのところが急でかなり飛び、緩斜面になるところがしやくれていて全体的にむづかしそうだ。男女ともこの滑降コースは、雪が滑るせいもあるがスピードの出るコースである。コース整備は最高で滑りやすかった。滑降練習をする機会に恵れない日本選手は、滑降では全く歯がたたない。急斜面における高速度旋回のむづかしさをつくづく感じさせられた試合だった。男子回転は違ったコースを二度滑りその合計タイムを取るという新方法で行われたが、選手達は大変のようだった。

今回の世界選手権では二十四個のメダルのうち十六個をとったフランスの圧倒的勝利に終わった。標高二七〇〇メートルという高いところで試合であったが、一体各国とも高度に対してどのようなトレーニングをしてきたのであろうか。日本は立山、乗鞍で合宿をしただけで、特に高度に対する処置はとらなかった。又この大会では

の選手が入ってきて活気づいてきた。日ましに選手がふえてスキー場ではいたるところでポール練習をしていて、ちょっと間違えれば隣りのチームのポールをくぐっているという有様である。十六、七日にエンブドウで男女回転競技、二十三、四日にコロラドで男女大回転が行われ、男子大回転競技終了後各国チームは一旦サンチャゴに降り、二十五日のサンチャゴでの市内パレード等に参加した後それぞれポルティエヨに入った。

二十六日にチームに割り当てられた三台のブロンコに乗り、ポルティエヨに向った。ポルティエヨまではサンチャゴから車で約四時間半かかる。最初のうちは道路は広く、時速百キロというスピードで快適に車は走った。両側の丘には青々とした芝生の中に巨大なサボテンがいたるところにあり印象的である。舗装道路が終り、凹凸の激しい道に入ると前方に雪をいただいた岩山がくっきりとそびえ立っていてなんとも言えない美しい光景である。両側にそそり立つ岩山を通り抜けて車はポルティエヨに到着した。ポルティエヨは岩山に囲まれた真中に湖があり、そのそばは黄色のスマートホテルが一軒と役員、女子選手の宿舎が二、三あるだけの静かなところで、ヨーロッパのスキー場とは違った良さを持ったスケールの大きいスキー場である。ポルティエヨに入ってから男女分れて練習することになった。毎日練習時間と場所が割り当てられるが、良い場所とポールを確保するのに一苦労だった。二十一日に日本から大杖さんが来て、これでやっと十一人全員がそろったと思っていたら、三十一日に男子滑降練習中に村田選手が転倒し脳しんとうを起こしてサンチャゴの病院に運ばれるという事故が起り、大会出場が危ぶ

選手、役員の荷物の輸送、コース整備、開門員まで全てチリー陸軍の兵士によって行われたのにはいささかびっくりしたし、宿泊設備がなかったせいもあるが、観客が少なかったのはちょっと淋しく感じられた。今回の大会で特に感じたことは、欧米選手と日本選手との間には試合経験等の外に技術的な隔りがあるということである。そしてその隔りをせばめ、かつなくすために日本選手が苦手とするヘヤピンカーブや高速度旋回等をより一層練習するのはもち論だし、科学的トレーニングを取り入れるなど陸上、雪上トレーニングの方法を再検討し、コーチ、選手が丸一丸となって練習に励まねばならない。また海外遠征などをしてFISポイントを取ること、外国の一流選手と接する機会を多くすることも必要なことである。確かに今回の世界選手権で日本は完敗した。しかし監督がコーチがそして選手の各々が自分の目でじかに彼らの滑りを見て、それぞれ何かを感じて帰って来たことと思う。この貴重な経験を無駄にせず次の目標に向って努力精進するべきだと思う。札幌オリンピックで日の丸をあげるためにも私達は頑張らねばならない。

第六回日本寮歌祭に参加(十一月五日・日比谷公会堂)

日本経済新聞(十一月六日付朝刊)記事より……五年前ほんの数校で始められた寮歌祭は毎年参加校がふえことは四十九校。参加者の平均年齢は四十六、七とか。いちばん楽しそうだったのはもちろん出演のメンバーたち。しかし、あどけない現役陣をまじえた成蹊高校が出演したときは、場内がシーンと静まりかえり母校を失った旧制高校卒業生たちのさびしい気持をちよつと示しているようだった。